

オッパニハー！

(クメール語で「大丈夫、問題ない」という意味)

尾道市立土堂小学校教諭 森下理奈

(派遣先)カンボジア バッタバン州 小学校教員養成校

1 平成19年7月～9月の活動の様子

7月下旬...1か月間の現地訓練を終え、いよいよ任地バッタンバンでの生活が始まりました。

8月上旬...学生と一緒に授業を受けたり、同僚に教育事情を聞いたりして、現状把握に努めました。

休憩時間や放課後を利用して、希望者に日本語の授業を始めました。(週6時間)

下旬...音楽と体育の授業を始めました。(週18時間)

9月.....学校は学年末休暇でお休みです。私は報告書や各種申請書を書いたり、教材研究をしたりしました。新しい住居も決まり、生活基盤を整えることもできました。

2 教員養成校の様子



毎朝7時からの集い

(国旗掲揚・国歌斉唱の後出席確認をします。)



池から水を運ぶ学生



井戸から運ぶのも大変！



雨水を使って水やり
日本も、もっと自然の恵みを活用したいものですね。

- ・ 2年制の養成校で、1学年9クラス、1クラスの人数は約28名です。卒業後は100%バッタンバン州の小学校教員になります。養成校では、入学金、授業料、教材費等、一切必要ありません。
- ・ 授業は7時から17時まで(土曜は11時まで)です。大変そう...に聞こえますが、何と昼休憩が3時間もあります！学生だけでなく教員も11時になると家に帰って御飯を食べ、水浴びをしたり昼寝をしたりします。
- ・ カンボジアでは教員が不足しています。原因の一つは、給料の安さです。生活をするには最低でも月100ドルは必要だと言われているのに、小学校教員の給料は月30ドルです。これだけでは生活できないので、多くの教員は副業をしています。“教師”という仕事に専念できません。
- ・ 学校には水道がありません。植物の水やりには、敷地内にある池の水や雨水を使います。トイレ用には、井戸の水をくんでバケツで運び、水を入れるところにためます。用を足した後は、桶で水をすくって流します。教室には、チョークを使った後など手が汚れたときに洗うための水が入ったバケツが一つ置かれています。毎朝学生が準備します。
- ・ 井戸水は日本の“冷たくておいしい”イメージとは異なり、生ぬるく、さびの臭いが非常にきついです。でも、寮生にとっては生活用水。洗濯も水浴びも歯磨きも炊事もすべて、この水を使うしかありません。

カンボジアの教育、ここが好き！



低学年でよく用いる絵カードです。厚紙で一つずつ作り、マジックで色をつけます。日本だとチューリップや車のカードをよく見ますが、カンボジアでは牛や豚、魚にマンゴーが題材になっています。超、生活密着型です！

教師用の1メートル定規や三角定規、そしてなんとコンパスまでも手作りです。教師が黒板に書いた設計図を頼りに、板をのこぎりで切り、カンナで整え、ヤスリで磨き、目盛りを入れ、ニスを塗って完成！
自分が使う教具を自分で作る、素敵だと思いませんか？

3 今、感じていること ~ 厳しい現実を目の当たりにして ~

カンボジアに来て、まず感じたことは、国内の生活格差があまりにも大きいということ。市場では、日本と同じ電化製品や食品が並んでいる横で、八工がたかった不衛生な（ように見える）食品が売られている。きれいな現代的な建物の横で、木や葉で簡単に作られた家で貧しい暮らしをしている人がいる。日本と同じような服を着て颯爽と働いている人の横で、ポロポロの汚れた服を着て「お金をください。」と懇願して生きている人がいる。

子どもも同じだ。小綺麗な制服を着て楽しそうに学校に行っている子がいるかと思えば、汚れた古いTシャツを着て働いている子がいる。レストランに入ると、すかさず小学生くらいの子どもが果物や菓子をかごに入れて寄ってくる。悲しそうな表情で、「お腹がすいているの、買ってください、お金が必要なんです。」と迫り、傍らから離れない。遺跡など観光地では、人なつっこい笑顔でついてきて、案内をしてくれ、別れ際に表情を一変させ「金をくれ。」と言う。

裸足で街を歩いて空き缶やペットボトルなど金目になるものを集めている子、観光客の飲み残しのジュースを店員が来る前に飲みほし、残飯をビニール袋に詰め込み走り去る子、そして道ばたでシンナーを吸っている子。見えないところでは、売春や人身売買も多いと聞く。

国内のこの格差はいったい、どういうことなのだろう。カンボジア人はどう思っているのだろう。

しかし、赴任して自分の生活が始まり、地元の人とのかかわりが増えてくると、国内格差よりも“自分”と“地元の人”の生活の差、つまり“先進国”と“途上国”の格差を感じるようになった。職場の美術の先生は、校舎横のトタン板で囲った小屋に住んでいる。5畳くらいの部屋にはベッドが一つ、数枚の服、七輪、そして画材道具がほんの少しあるだけだった。窓もなく、太陽の熱をまともに受けている。扇風機が回っていたとはいえ、熱風にしかならないだろう。水道はなく、水浴びや洗濯、炊事は学校のさび臭い井戸水を使っている。

休日、学校の食堂（屋外）の屋根の下で、油絵を描いていた。プロレベルだと感じた。画板は高く買えないそうで、手作りしていた。まず木をちょうどよい長さに切り、枠を作り、服などの古布を張ってホチキスで留める。そして、白い塗料や描きやすくするための液体を塗って乾かす。水入れはペットボトルを切った物。絵の具は高くてなかなか良い物が買えないと、残念がっていた。でも、絵を描くのが好きで、描いた絵を人にあげるのが好きで、もっともっと絵を描く時間が欲しいと切望していた。

ある日、日本の図工の教科書や、学校の写真を見てもらった。芸術家タイプの先生にはあまり関心がないかな、と思っていたが舌を巻いて驚き、「子どもの時にこういう教育を受けられるのは本当に素晴らしい！」と感嘆していた。そして、「日本にはいろいろな物がたくさんあっていいね。子どもも、教える先生も楽しいだろうね。カンボジアには何も無いから...。」と。

私は、この「物が無いからできない」という考え方を変えてほしい、今あるもので作る楽しさが味わえる授業をしたい、と思っていた。カンボジアに来る前に私の頭にあったのは、廃材や自然物を使った工作。しかし、ここに来て、“廃材を使った工作”ができるのは“廃材がでるような生活”ができるからこそできること、だと知った。トイレットペーパーやラップの芯、ティッシュやおかしの空き箱、牛乳パックや卵パック...、そんなものが“廃材”として出るような生活をしている人は、ほとんどいない。

日本のことや自分のことをいろいろ知って欲しいと思っていた私。でも、このような厳しい生活をしている人々を前に、日本で日常生活や学校生活の様子を全部、話せないと思った。

同じ地球で、同じ時代に生きているのに、なんだ、この不平等は。

自分が先進国と呼ばれる日本で育ち何不自由ない生活を送ってきたこと、その裏で厳しい世界で生きている人々のことを本気で知ろうとしなかったこと、そしてカンボジアに住み、カンボジアの現実を知ってもなお日本とほぼ同レベルの生活を維持していることに、何とも言えない罪の意識を感じている。

しかし、自分を責めるだけでは、自分の無力感を嘆くだけでは、何も変わらない。一つひとつ、自分にできることを誠実にやっていきたい。